

あびこの文化

発行人 大洋 美崎 我孫子市 高野山 250-23 04(7182) 0861

秋の特別講演会のお知らせ

我孫子のオビシヤに見る、二本足のカラスの的とは？

新型コロナウイルスの感染者数の推移に目が離せない状況が続いており、外出もままならない毎日です。

偶数月に開催していた「放談くらぶ」も暫く休会となりましたが、今回、秋に向けて「特別講演会」を開催することになりました。演題は我孫子に馴染みの深い「オビシヤの謎を解く」。「オビシヤ」の研究において、日本の第一人者である萩原法子氏から、「オビシヤの本源的な意味」について講演いただきます。(申込み方法は8ページ「放談くらぶ」)

日時 十月十七日(土)

午後2時開演(1時30分開場)

会場 並木近隣センター会議室(2,3号室)

主催 我孫子の文化を守る会(放談くらぶ)

演題 「オビシヤの謎を解く」

—二本足のカラスの的からさぐる—

講師 萩原法子氏

講師の略歴 東京女子大学文理学部史学科卒。文化庁文化審議会専門委員、国際日本文化研究センター研究員、了徳寺大学非常勤講師を歴任後、現在、市川市・野田市・柏市の各文化財保護審議委員、千葉県立



生涯大学校浅間台校舎講師。また楊名時太極拳師範の資格を有し、北国分ふれあいボランティア(結いの会)代表、アンクルンの会代表、「紫香会」(観世流謡曲)会長も務め、幅広く活躍している。

講演にあたって(講師の言葉)

大学2年の夏、私は秋田県仙北郡の農村を訪れた。

史学科の選択科目であった郷土調査の授業を受け、授業の一環としての民俗調査であった。農村での生活体験は初めてで、見るもの聞くもの全てが珍しく新鮮であった。何気ない生活の中に潜む深い信仰、折々の暮らしに生きている年中行事や儀礼、血縁、地縁を重んじる村の人々の人間関係など、人として生きる上で、くらしのリズムや知恵がたくさんあることを知った。

53年前、結婚して市川に住み始めた。父の仕事の関係で各地を転々とし、「ふるさと」と呼べるところが無い私にとって、これからも住み続けるであろう市川は私のふるさとであり、子供にとつてもまた市川がふるさとになる筈である。学生時代の秋田での調査体験を生かし、「ここ市川を歩こう」ということで昭和60年に「いちかわ民俗誌」を刊行。様々な民俗の中で、特に関心が深かったのは市川市の無形民俗文化財に指定されている「にらめつこオビシヤ」だった。オビシヤは江戸川沿岸一帯に多い呼び名であるが、百手祭、お的、弓祈禱などと呼ばれる年頭の弓神事で、全国に見られ、日本の祭り・年中行事の中で最も数多く行われ、最も重要な神事である。そのため古くから注目を集め、オビシヤ行事に含まれる様々な要素の分析や研究などがされてはいるが、全容は明らかにされていない。オビシヤは、「的に当たるとその年は良い年、当たらなければ悪い年」という年占(としうら)にあるとする柳田国男の説が定説となり、明治以降、永らく津々浦々に定着し続けてきた。



地元でオビシヤを見たことから、オビシヤへの関心が深まり、その後各地のオビシヤを見て回った。

しかし、柳田の言う年占説には納得がいかず、ずっと疑問を持ち続けていた。ある日、中国取材から帰国した夫の話から、射日神話、招日神話の話聞いた途端、以前か

ら気になっていた二本足のカラスを的にするオビシヤがあるのを思い出した。一般的なのは鬼や丸(〇)であるが、以前から二本足のカラスは太陽と知っていた私は、それをキーワードにすれば、オビシヤの真の意味・目的が解けるかも知れないと直感。

そこで私は、それまで全く顧みられることのなかったオビシヤの的を丹念に調査することにし、平成3年1月の25か所の現地取材から始まり、その後5年の間に電話、手紙など含め450か所の調査、取材をしたその結果、オビシヤは柳田国男の「年占説」という消極的なものではなく、新年に「太陽の死と再生」・太陽のよみがえりを儀礼化することで作物の豊穰を祈り、人間の「生き死に」をかけた重要な行事であると結論づけた。

平成11年、『熊野の太陽信仰と二本足の鳥』を上梓。二本足の鳥の的を発見したことで、柳田国男の定説を否定することができ、オビシヤの原初の目的、意味を提示でき、『日本民俗大辞典』に新説として取り上げられた。



今回は、パワーポイント(画像を映写しながらの説明用ソフト)で、まず、オビシヤがどんなものかを我孫子のオビシヤの画像からみていただき、二本足の鳥と太陽の結びつき、天皇の礼服や仏像、祭絵画など様々なものに表わされている二本足の鳥など放映、そしてオビシヤの背後にある中国の太陽説話なども資料を映像化してお話させていただきます。(写真は二本足のカラスの的を射る場面)

た(中略)。昭和37年2月12日NHKテレビ放送で、兼子夫人の「50年の歌日誌を聞く機会を得て、柳翁に会いたくて会えなかつた望みが思いがけなく満たされた気持ちとなった。「鴉(からす)」の独唱や民謡の味を思わせる「苗や苗」の独唱が心にしみる思いがした(中略)。4月下旬、倅雅美が南極から帰国したのを機に上京して柳翁の霊を弔いたいと思つたが、時間の余裕がなく困り抜いていたところ知人小松耕輔君の紹介を得て、失礼ながら声だけの訪れをしたところ、令夫人は心持よく応接された。洗礼された声と智性と信仰で磨かれたものごしは自ずから言葉のはしほしに伺われてなんともいえぬ床しさを覚えた」

熊太は戦後まもなく浄土真宗に深く帰依し、仏教関係の本も多数書いている。宗教家としての柳宗悦に「会いたかつたのに会えなかつた」ことはさぞ残念な事であつたらうと思う。柳宗悦は昭和36年に亡くなつており熊太はその頃には香川県に帰郷していたので、行動力に勝る熊太でも会う機会を失した

以上で嘉納、菊池、志賀、柳の諸氏の紹介を終えるが、以下、蛇足ながら村山熊太、雅美について少し説明する。

熊太の回想録はそれぞれは短文であるが全員に和歌のようなものを付けてあるのが特徴である。回顧録の中には鈴木貫太郎(孝子夫人)、松永安左門、山岡荘八、松下幸之助、諸橋轍次、茅誠司、小泉信三、新村出、中曾根康弘などの錚々たる人物の名前がある。熊太は生涯に19冊の著作を残した。最初のころは大正6年「修養經典」大正7年「女子書簡文宝」大正8年「文章精選」など教育関係、戦後は昭和24年「この光」など浄土真宗、特に妙好人に関する本が多い。昭和27年「年表式日本文学解説」という学習用教材も編集しているが、この本の序文は新村出に書いてもらつている。その他、彼の著書の序文は、高橋健二、大谷光昭、森田たまなど有名人に依頼しているのが特徴である。

嘉納治五郎の銅像、菊池寛の銅像とは比べべくもな

いが、この熊太も銅像が立つている。

熊太は明治14年香川県岡田村(現丸亀市)で生まれた。戦後郷里に帰り、教育委員長の委嘱を受けるなど名譽職に就いていたが、この時代の功績は昭和32年に小学校の校歌を作詞したこと、小学校の為に小泉信三から「よき友とよく学べ」という短冊を書いて貰い、これを記念石碑に仕立て校庭に建立したことか。別に小泉信三からは「独立の気力なき者は国を思うこと深切ならず」という学問のすすめの一節を書いた色紙も貰つて、これも小学校に保存されている。小泉信三は東大の茅誠司から紹介を受け自宅を訪問、「右手が思うように動かない」といったん断られたが後に短冊が送られてきて感激したという。貰い物では犬養毅から「凡上千古」という額、鈴木貫太郎の孝子夫人からバラの絵、入江為守から「仁者得其寿」、大谷光昭から「春和景明」、島村速雄から「寿福之首」などの書を貰つていた。

また、子息村山雅美が第一次南極観測から帰国した昭和32年ころ、小学校で南極探検の講演をさせた。その際、雅美が持ち帰った南極の石は小学校に保存されている。

昭和天皇が昭和25年、40年の両年に四国巡幸された際、拜謁にあずかり、賜り金及び洋菓子とタバコを頂いた。

銅像は昭和35年に村長の提案で80歳記念として小学校校庭側に建てられた。今の小学生には「校歌を作つた人の像」と認識されているらしい。昭和48年勲四等瑞宝章受章。昭和50年、94歳で逝去したが、天皇皇后両陛下から祭葬料(香典)を下賜された。

子息村山雅美は大正7年東京で生まれ、旧制松本高校を経て東大経済学部に入學し、スキー山岳部に入部した。繰り上げ卒業後、海軍予備学生、予備少尉で戦艦「長門」、航空母艦「瑞鶴」に乗船した。戦後日本鉱業に勤務中、昭和28年に日本山岳会榎有恒会長の誘いにより第一次マナスル登山に関係し、主として現地との調整、設営などに関わつた。

昭和30年に西堀榮三郎から誘われ、第一次南極観測に設営として参加し、越冬隊長3回、観測隊長4回を務めた。とり残された樺太犬タロ・ジロの発見や南極点往復調査などでも有名になった。雅美にもマナスル登山、南極観測などに関する7冊以上の著作あり。平成18年、88歳で逝去した。勲三等旭日中授賞従四位と、父親を上回る褒章にあずかつている。

嘉納治五郎を偲ぶ箇所を紹介を簡単にするはずのところ、紙数が増えてしまったことをお詫びしたい。しかし、この小文を書くにあたって村山熊太、雅美両名の著書を読み返すことになり、図らずも両名を一回想「偲ぶ」ことになった。きっかけとなった嘉納治五郎の銅像に感謝である。(文中敬称略)

第138回 史跡文学散歩報告

『銅像見学を中心に治五郎ゆかりの地を巡る』に参加して

若月 慎爾

梅雨明けが遅れ、7月18日(土)は中止、1週間後の25日(土)に講師の文化を守る会の会長美崎さんの決断で、雨まじりの中での散歩でした。

我孫子駅に集合、「飯泉喜雄顕彰碑」を見た後、明治39年(1906)建設の「山一林組我孫子製糸所」(現イトーヨーカドー我孫子南店跡地で、大正14年(1925)建立の『蚕霊塔(さんれいとう)』を見る。最盛期には工員300人を抱え、生糸5,000貫を生産し、昭和60年まで操業していたという。私が我孫子に転居したのは昭和61年、すこし残念な思いがしました。

雨の中、小熊家の萱葺きの屋根を眺めて『鈴木屋』へ。ここには嘉納治五郎先生の書簡が飾られている。行草の達筆で書かれた招待状「我孫子に別荘を構えたので懇親のため角松旅館にて宴会を催すから来て貰いたい」と書かれている。飾られていたのはレプリカで真筆は別に保存されているそうである。おかみさんがわざ

わざと真筆を持参してくれたが、我々が退去した後で、折角の「厚意が無駄になり、すこし残念だ」とした。

そこから角松旅館を訪れる。ここには嘉納治五郎先生の額「從善如流」(善に従うこと流れる如し)がある。ここではゆつくり時間をとり北白川宮の愛馬の写真なども見る。突然の大勢の訪問を受け入れて、快く展示物を見学させて貰えたことに感謝である。

我孫子宿本陣の案内板を読み、子の神さまの案内石碑を見てから大光寺へ、ここには「杉山英先生の碑」がある。

杉山英は明治5年の学制発布の時、延寿院を校舎として開校された我孫子小学校の教員となり、その功績と人柄を慕って、血脇守之助をはじめ多くの教え子が拠出、我孫子町の基金も含めて、大正8年(1919)顕彰碑が建立された。

その碑の揮毫者が、当時我孫子に別荘を持っていた嘉納治五郎である。大きな碑で見たえ十分だが、石塔が沢山で、込み入りすぎているのが気になりました。解説の終わるのを待つようにミンミン蝉の鳴き声が、

誰の声か「あ、蝉の声、今年初の蝉だ」周りも皆頷いていました。今年梅雨明けが遅い。

いよいよ、今日のメイン、三樹荘、天神坂、嘉納治五郎別荘跡(天神山緑地)へ向かう。

天神山緑地のもっとも見晴らしの良い方角、運が良ければ富士山の見える方角を向いて、すっきりと立った羽織、袴姿の嘉納治五郎先生の像。生前から本人と交流のあった文化勲章受章者、朝倉文夫先生の力作である。

生憎の雨交じりの中で、銅像を背にして美崎会長の解説に熱が入る。中断して全員での写真撮影のあと、雨が強くなつてきて、全員緑地の中の東屋に避難しました。

この東屋にも治五郎先生の額「以人爲鏡」力必達」のレプリカが掲げられています。(この原本は我孫子第一小学校にあります。)

東屋に移動してからも美崎さんの解説は続き嘉納像にかけた熱意の程がしのげられました。



雨が上がり流れて解散、楚人冠公園、杉村楚人冠記念館、庭園、志賀直哉邸跡を巡って見学会は終了。美崎会長ご苦労様でした。

7月31日(土)千葉テレビで銅像建立を放映
我孫子市公式及びこの魅力発信チャンネル
チバテレシャキット!あひこナビ7月の番組で「市民の力、嘉納治五郎 銅像建立」が放映されました。YouTubeで見られます。
<https://www.youtube.com/watch?v=n90x-PwJ2PY> DVD貸出し希望の方は美崎まで。当会ホームページにもアップ(登録)しています。

我孫子散歩(二〇二〇・七・二五)

三文士夫妻揃へる写真あり

使用人も共に並び立ちて

駅用地を寄付せし人の顕彰碑

建てて幾年苔むし始む

三谷 和夫

我孫子駅前

飯泉喜雄

まゆを蒸しにほへる汁を流したる
面影は失せデパートとなる

生系工場跡

遠く来て工場に働き夫を得し
人ら大方鬼籍に入りぬ

明治初の郵便局を始めし人を
知る老ありや今日訪ひ来れど

小熊勝夫

嘉納治五郎巻紙に書き残しあり
別荘建てしを告げむとせしか

鈴木屋

本陣跡に標柱建てむとせし時に
役所が建ててくれしはこれぞ

水戸道中武士ら勢ひ行きけむを
細々と書く看板の立つ

元生徒と料亭に来て昼を食ふ
勢ひ飲めば味はひ知らず

料亭角松

舟に来て沼に咲く蓮見し後に
料亭に昼餉食むはまた良し

この街に人を育てし杉山英
鳥居の奥に碑を残すのみ

低かりし歯科医の地位を上げし人
血脇守之助を知る人乏し

白く光る沼見放けつつ像は立つ
今し緑のおほへる丘に

嘉納治五郎

陶につくる句碑の立ちたり雨上がりの
空をうつして沼光る見ゆ

楚人冠公園

杉村楚人冠住みし日遠し濃緑に
茂る椿に見るべし花を

志賀直哉の書斎の縁に子らも並びて
夕日眺めし遠き日思ふ

教育は財もて為すに非ずと言ひ
君は借財あまた残せり

君逝きて借財残り幾十年

この街は世に知られざりけり

岡に立つ像見むと来て雨降れば

東屋に入り君の書眺む

嘉納先生銅像



手賀沼遊歩道を散歩して

手賀沼公園から手賀沼に沿って、手賀沼漁業協同組合フイツングセンター付近までの約5.3キロメートルにわたり遊歩道が整備されている。

沿道にはベンチを配置した広場などの休憩箇所やトイレもあり、手賀沼を眺めながらの散歩、ジョギングなどを楽しむ人も多い。最近はいくつサイクリングロードとしても認知されたのか、ヘルメットを着用した家族と思われる数人や、男女のグループが颯爽と走り抜けることを見ることが多い。朝夕は犬を連れた老夫婦がゆったりと散歩する光景にも出くわすこともあり、市民の憩いの場として親しまれている。

また、本格的な野鳥観察などのイベントが催されることもあると聞く。近くに「鳥の博物館」、「手賀沼親水広場」があり散歩以外にも見所がたくさんある。

この遊歩道に設置されている掲示板に最近、「嘉納治五郎の銅像建立の案内」が出ているのを発見。教育委員会文化・スポーツ課が掲示したものという。

起点は水の館付近、沼の中に河童の彫刻が置かれている辺り。そこから東に向かい滝不動の辺りまで、掲示板が500メートル間隔に立てられている。



が建ちました！このタイトルと文化を守る会「短歌の会」メンバーらが作った「銅像建立を祝う歌」、銅像の写真が表示されている。途中、観賞用花蓮（ぐうしれん）、コスモス、ユブハクチョウを発見した。(T・M)



それぞれの掲示板には起点（スタート）からの距離と、ユリカモメ、カルガモ、アオサギ、フクロウ、カワセミの絵が描かれており、その下に「嘉納治五郎の銅像」



(500m毎の掲示板と花蓮など)



柳田国男、岡田武松そして伊勢イネ(その1)

戸田 七支(かずゆき)

11月14日(土)に予定している史跡文学散歩は柳田国男と岡田武松にゆかりのある布佐を訪ねる。

その二人の関係の変化に美少女の存在があった。明治20年8月3日、年長者に連れられた一人の少年が布佐の河岸から対岸の布川(利根川を渡った。この少年こそ後に民俗学の父と呼ばれた柳田(松岡)国男13歳である。少年は兵庫県神崎郡福崎町より、茨城県北相馬郡利根町布川で医院を経営する長兄鼎を頼つての長旅であった。両親は家族に先立つて国男を長兄鼎の下に置き十分な教育を受けさせる予定であった。しかし多忙な長兄は国男の面倒を余りみなかったようである。両親や弟達が合流する迄の2年間、自然児の様な生活をさせていた。医院の土蔵には硬軟入り混じった蔵書が多くあり、これらを片っ端しから読み漁る、屋敷神の扉を開け翡翠の玉を見て失神してしまふ、徳萬寺の「間引き絵馬」を見て戦慄を覚えた後の民俗学への原体験をする等々濃密な少年期を過ごした。2年後の明治22年9月、兵庫県神崎郡より両親一家が布川へ移住してきた。国男の体も精神もそして生活環境は大きく変わろうとしていた。

母親のたけ(父の操はうつ病)は国男が2年間学校へも行かず遊んでいた事に大変危機感を持ち、国男の就学先を探した。幸いにも対岸の布佐に播磨屋と言う呉服屋があり、その息子(岡田武松)が前年日比谷中学へ入学していたことを知り、同郷人と思ったのであろうか相談に訪れた。二人の母親は会うなり、互いに意気投合したものと思われる。これからの世の中は子供に高等教育を身に付けさせることが大事であると共に考えていた。こうして両家は親密な関係を持つこととなった。

4年後の明治26年2月、松岡家は布佐に医院(凌雲堂医院)を開設した。場所は岡田家のすぐ近くで、武松の母ひさが呼び寄せたのであろう、土地も分けて貰ったと伝えられている。(次号に続く)

(8ページに史跡散歩の詳細案内あり)

プロジェクト報告 百人一首を楽しむ会(番外)

美崎 大洋

今月の歌

夏の夜は まだ宵ながら 明けぬるを

雲のいづくに 月宿るらむ (O36)

解釈

「夏の短い夜は、宵になつたと思つたらすぐに明けてしまふ。月は、雲の間のどこかに隠れているのだろう」(解説)夏は夜が短いから、女性と夜にともにいる時間が短くなつてしまふということをも嘆いている。通い婚の時代である。夜暗くなつて女性のもとを訪ねた男性は明るくなる前に帰らねばならない。当然、冬より夏は夜が短いのだ。

作者

清原深養父(きよはらのふかやぶ)

908年(延喜八年)内匠少允、923年(延長元年)内蔵大允等を歴任、930年(延長八年)従五位下に叙せられる。晩年は洛北・岩倉に補陀落寺を建立し、隠棲したという。

舍人親王の裔。豊前介房則の子(または房則の祖父備後守通雄の子)。後撰集の撰者元輔の祖父。清少納言の曾祖父。勅撰歌人であり、『古今和歌集』(17首)以下の勅撰和歌集に41首が入集している。藤原兼輔・紀貫之・凡河内躬恒などの歌人と交流があった。家集に『深養父集』がある。琴にも秀でていたという。

通い婚

古代日本における婚姻の基本は、男が女を見初めて女のもとに通う、あるいは女の家族が男を迎え入れるといったことを基調としていた。つまり女を中心として婚姻が成立していた。

男が女のもとに通う通い婚の具体的な姿は、万葉集や日本書紀に散見される。また男が女の家に同居する妻方居住婚の例も多く見られる。それに対して、女が男の家に住む夫方居住婚は、女の身分が男に

比べ極端に低い場合など、例外的なケースだったと見られる。

万葉集は古代末期の日本人の歌集であるが、そのなかには庶民の生活感情を歌った歌が多く含まれている。それらを読んでまず感じることは、男女の性愛が極めて自由なことである。女は気に入った男に対して極めてあけすけとものを言っている。男は気に入った女のもとに、しげしげと足を運ぶ。男女が晴れて結ばれるに際して、最も影響力を及ぼすのは女方の母親の同意のようである。女はいつも母親の目を気にしながら男と逢う、そんな光景が思い浮かんでくる。

万葉集には、両親を歌った歌が100首ばかりあるが、それらの殆どは母親を歌っており、父親だけを歌つたものは1首しかない。子の母親に対する情愛は現代にも通じるものがあるが、万葉集の世界においては、子は父と同居することがなくても、母親とは常に強い絆で結ばれていた。右の数字はそのことを反映しているのだともいえる。

次の二首も通い婚の歌とされる

なげきつつ 一人ぬる夜の 明くるまは

いかに久しき ものとかは知る 右大将道綱母

明けぬれば 暮るるものとは 知りながら

なほ恨めしき あさばらけかな 藤原道信朝臣

関連狂歌

夏の夜はまだ酔ひながらさめぬるは

腹のいづくに酒やどるらん

我孫子市の巨木・名木を訪ねる会

第210回 調査報告(平成27年12月)

会報未掲載分

佐々木 侑

二十四節気では12月7日から大寒となつており、12月10日(木曜)閉塞成冬(せらさむくふゆとなる)のこの日、成田線東我孫子駅前(7名(男性6名・女性1名)が集合し10回目の巨木調査を実施した。当日の調査行程は

東我孫子駅 9:00 ↓ 旧成田街道一里塚 ↓ 岡発戸谷津 ミュージアム西 ↓ 個人宅庭 ↓ 近隣センターこもれび ↓ 我孫子ゴルフ倶楽部側道 ↓ 岡発戸市民の森 ↓ 滝不動尊 ↓ 日立総合経営研修所 ↓ 我孫子中学アニス場 ↓ 水神山古墳 ↓ 香取神社 ↓ 若松交差点 12:30 ↓ レストラン コス昼食 ↓ 解散
 行動時間3時間30分 歩行数計14,500歩
 調査樹木本数10本・巨木本数10本(081~090)、参考樹木本数0本

旧成田街道一里塚

慶長九年(1604)頃の一里塚。江戸日本橋を起点にして水戸街道が通っていたが柴崎経由に道替えが行われ、取残された旧水戸街道(その後旧成田街道)の一里塚である。

江戸時代の一里塚には目印とされたエノキが植えられていたそうだが、現在はシラカシ・スギ・ユブシ・マツなどが屹立しているが巨木はない。

岡発戸谷津ミュージアム西側の山道脇

081 ヤマザクラ(樹高18.2m 幹周370cm)



個人宅庭内(岡発戸897 1氏宅)

082 スダジイ(樹高17.6m 幹周405cm)

枝振りが覆いかぶさるほどの巨樹であり、農業に携わり生活する住民の歴史が感づかれた。

近隣センターこもれび(近衛文麿公別荘跡地)

昭和六年(1931)頃、当時の首相近衛文麿公爵の別荘があった場所で、別荘があった当時から庭園が整備されヒマラヤスギの巨木が2本ある。構内の樹木(コナラ・ユブシ・アカメカシワ・サワラ・イヌシデ・ムクノ

キ・シロダモ・エノキ・アカマツ・ソメイヨシノ・ナツツバキ・アオキなど)

083、ヒマラヤスギ①(樹高31.7m 幹周315cm)

084、ヒマラヤスギ②(樹高28.5m 幹周350cm)

ヒマラヤスギの別名はヒマラヤシーダー、ヒマラヤからアフガニスタン原産で枝葉は水平に広がる。



岡発戸市民の森

広い森の自然がそのまま活かされ散策・自然観察が楽しめる。

森の樹木(ハリギリ・ユナラ・イボタノキ・ゴンズイ・サワフタギ・イヌザクラ・ウワミズザクラ・ヌルデ・ハゼ)他、標示の説明版には33種の樹木が記載されているが、巨木はない。

滝不動尊相馬霊場三十六番札所(岡発戸1271)

山号:滝前山宝積寺・現在正泉寺管理地無住。9世紀頃、平高望王が空海作不動尊蔵を奉ったとの由緒が伝えられている。堂宇は寛和二年(986)の将門の乱後に損壊したと云われ当時の本尊は無くなっている。文化十三年(1816)に現在の不動堂が建立された。

志賀直哉の小説「矢島柳堂」に登場する藤棚があるが、巨木はない。

芭蕉句碑・慶応三年(1867)銘「清滝や波にちりこむ青松葉はせを」との句碑がある。

日立経営研修所(高野山489)

本館を移転・新築工事中で未調査、工事完了後に改めて調査をお願いする所存。

我孫子中学校・テニス場脇

テニス場脇にエノキ数本とイヌシデ・フジの木の広場があり、エノキ2本を調査した。

この地は個人所有地で将来宅地とされることが計画され、残念ながら伐採予定との事である。

085、北側エノキ①(樹高26.4m 幹周340cm)

086、南側エノキ②(樹高22.2m 2本株立320cm + 170cm 幹周490cm)



水神山古墳(千葉県指定史跡)

東葛地区最大規模の前方後円墳で4世紀末のものと考えられている。

大和朝廷と繋がりがあった豪族の墓。埋葬者は出土品などから女性首長ではないかと言われる。

古墳は雑草など取り除かれて清掃管理されている。

水神山古墳西側山林

古墳から右に曲ると高野山香取神社だが、直進しふれあい通りへの階段を下りると途中右側にケヤキの巨木がある。個人所有と思われる。

087、ケヤキ(樹高31.9m 幹周315cm)



高野山・香取神社(高野山432)

祭神:経津主命(ふつぬしのみこと)、古老伝によると創立は天慶二年(940)創立とされるが定かではない。

江戸時代に香取神社の勧進がなされたと推測され、それ以降高野山地区の鎮守として信仰されてきた。

明治41年6社を合祀した。

社殿・昭和53年コンクリート造に改築、権現造形式・拝殿・相の間・奥殿、奥殿に本来の本殿が納めてある。

境内には円墳2基と方墳1基が現存している。

088、石階段下右・巨木イチョウ(樹高22.20m 幹周625cm)

樹齢は500年以上と伝えられている。市内最大の巨樹イチョウである。

089、クスノキ(樹高31.7m 幹周390cm)神社拝殿左前
090、イチョウ(樹高25.5m 幹周390cm)拝殿前・向かつて左側



見廻り終了後、若松交差点のファミレス「ユコス」で昼食と反省会をして、解散した。

(写真は付けられた番号081から090まで順次掲載)

手賀沼のハスが全滅!

2、3年前まではハスが繁茂しすぎて、いかにして繁殖を防ぐか、関係者が苦慮していたが、今年、手賀沼のハスが全滅したようだ。昨年9月に柏市の南岸を中心にハスの繁殖域が減少、一部で消滅する事態になっており、「美しい手賀沼を愛する市民の連合会」が現地調査をしていた。見物用棧橋も現在立ち入り禁止となっている。原因は未だに不明の様子。

昨年まで夏の風物詩となっていた手賀沼を船で巡り、ハスの花を觀賞する観光は、今年、新型コロナウイルスの影響に加え、ハスがほぼ全滅したため、大きな打撃を受けている。老舗釣り船店「手賀沼の小池」は毎年ハス見舟を運航していたが、今年は2隻のハス見舟が棧橋に係留されたままである。

第二十四回短歌の会(最終採択の一首)

七月二十一日実施

今に見る母のつくりし梅干しと
父の使ひし茶しぶの湯飲み

佐々木侑

雨上がり雫の煌めく半夏生
白き葉色に歌の友想ふ

飯高美和子

「短調の曲が好きね」と友言へば
わが性格にふと気づきたり

美崎大洋

悲しみも時は思い出とかえてゆく
母の死さえもあわあわとして

納見美恵子

沼を愛すと勢ひみたりし友の亡く
十余年経て会は閉ぢむか

三谷和夫

「何時いつか」とは不思議な言葉微かなる
希望と不安胸に仕舞えり

藤川綾乃

ほむらたつ木々の芽ぐみは身の内に
ひびきて騒ぐ齡(よわい)経たれど

大島光子

手賀沼の道標(みちしるべ)には新しく
嘉納銅像立つと記しあり

村上智雅子

葉桜の樹下(こした)に夫と歩みきて
早乙女のごと息つめて寄る

伊奈野道子

今後の行事予定

第139回史跡文学散歩について

「柳田国男の青春の地を訪ねる」

「民俗学の父」と呼ばれた柳田(松岡)国男は明治20年、布佐河岸の対岸・布川で医業を経営する長兄鼎を頼つて来た。長兄の家に置き、国男に教育を受けさせたいとの両親の思いがあった。その後、2年間、国男は自然児の様な生活を送り、医院の土蔵の蔵書を片っ端しから読み漁った。また徳萬寺の「間引き絵馬」を見て後の民俗学の原体験をする。明治22年、兵庫県神崎郡より両親一家が布川へ移住してくる。

明治26年、松岡鼎は布佐の岡田武松家の近くに医院「凌雲堂医院」を開設した。布佐の岡田武松は第一高等学校の1年先輩で、国男は武松と親しく交わることとなったが、やがてその関係は終わる。その破綻の原因に一人の女性、伊勢イネの存在があったのではないかと想像する。岡田武松、柳田国男と二人の文化勲章受章者に愛された薄幸の美少女伊勢イネの痕跡を訪ねます。昼食後柳田国男記念公苑を訪問。皆様の参加をお待ちしています。

日時 11月14日(土) 小雨決行

集合場所・時間 JR布佐駅改札前9時40分集合

行程 竹内神社―勝蔵院―旧凌雲堂医院―イネの旧家などを散策。昼食後、(タクシー利用)利根町

柳田記念公苑を見学(利根町生涯学習センター―大津さんの案内を受ける予定)。

◎参加費 会員無料 非会員五〇〇円

申込先 戸田七支

TEL 0880-6527-3824

FAX 0471-149-1648 まで

□ 市民のチカラまつり2020(当会協力イベント)

「我孫子にずっと住み続けたい。ふらふら散歩」日時 9月27日(日)午前9時15分〜正午・小雨実施場所 アピシルべ前集合(先着20名)

内容 嘉納治五郎ゆかりの場所を解説付きで歩く

講師 越岡禮子氏・村上智雅子氏(当会役員)

申し込みTEL&FAX 7165-4370

市民活動スアーションまで

□ 「放談くわい」

日時 10月17日(土) 14時〜16時

会場 並木近隣センター会議室2.3号

講演 「オビシヤの謎を解く」

―二本足のカラスの的からさぐる―

講師 萩原法子氏

◎参加費 会員無料 非会員三〇〇円

申し込みTEL&FAX(七二八五〇六七五)佐々木

(一ページの講演会案内を参照ください)

□ プロジェクト「短歌の会」予定

第二十五回短歌の会

日時 9月22日(火) 13時30分

場所 天王台東高野山自治会館(変更になりました)

□ 当会企画のイベント

「川めぐりと木下の史跡散歩」

日時 10月10日(土)午後1時〜午後4時 雨天中止

集合 印西中央公民館(木下駅より徒歩10分)

内容 手賀川下流を遊覧船で周遊し手賀沼の現況を知り、印西市木下の史跡を探訪します。

募集 10名

申し込み ハガキに、参加者氏名(1名のみ)、住所、電話番号を記入し、

T270-1144東我孫子2-36-39

斎藤方 我孫子の文化を守る会へ

(9月25日必着、応募者多数の場合は抽選)

編集後記

急浮上の総裁選報道によりコロナ関係報道は減少傾向。毎日、満員電車で通勤し、都心の高層ビルに何百人もが集まるオフィス街でクラスターが発生しても不思議はないが、意外に発生していない。各企業それなりの感染防止策を講じている結果か。夜の飲食街での感染発生にはマスクを外さざるを得ない事情がある。マスク着用による感染防止の有効性は以前よりは明らかになくなった。▲現在、未だにコロナ撲滅の決定的な解決策はないが、今後も細菌やウイルスに対して、人類が無力であるという事はないだろう。しかし超大国が競って開発している核兵器がコロナに対して無力であることは今回、確かになった。(美崎)